

開港期の釜山からみた日本の朝鮮認識

朴 晋雨

I. はじめに

II. 近代日本の朝鮮認識

III. 釜山の開港と日本人居留地の形成

IV. 釜山での日本人の経済活動

V. 日清、日露戦争と高まる植民熱

VI. 結びに

I. はじめに

近代の日韓関係において下関と釜山をつなぐ関釜連絡船を通じて民族移動の様相とその実態を探る作業は、これまでの日韓関係史の研究ではそれほど注目されてこなかった。しかし、こうした側面を具体的な実証によって再照明することは、近代国民国家の形成期において越境する民族の移動が相手に対する認識にいかなる影響をおよぼしていたかを理解するうえでも重要な手掛かりになるだろう。

さて、近代にはいつの日韓の間の民族移動は関釜連絡船の就航によって始まったわけではない。関釜連絡船が運航を開始したのは 1905 年からであるが、1876 年の開港から「新天地」を求めて渡って来る日本人の数は年を追って増えていた。そこで、関釜連絡船が就航する前から開港地の釜山に渡航してくる日本人の階層と部類を分析し、彼らの居留地での言行を通じて朝鮮および朝鮮人に対する他者像がいかん形成され、またそれが内地の日本にどのように伝えられていたかを調べることは、近代日本における朝鮮認識に対する具体的な実態の断面だけでなく、朝鮮の植民地化の過程における特徴を理解する上でも重要な意味があるといえるだろう。

近代日本の朝鮮認識についてのこれまでの研究では、日本の支配層と知識人の朝鮮に対する蔑視観はすでに幕末から共有されており、壬午軍乱、甲申政変、甲午農民運動などと日清、日露戦争を経ながら朝鮮に対する蔑視観と優越感が一般の民衆の間に拡散されていったことが指摘されている¹。しかし、これらの研究では民衆レベルでの朝鮮認識についてほとんど抽象的に論じており、その具体的な実態を論じたものではない。一方、最近では開港以後の特定地域に焦点をあわせた研究や経済史などの特定の分野と主題に関する細密な研究²、そして特に明治時代から植民地時代にかけて朝鮮に渡ってきた日本人に関する研究³などは在日朝鮮

人の問題と表裏一体の関係で在朝日本人の全体像を描き出して示唆するところが少なくない。しかし、こうした研究の進展にもかかわらず、開港場の釜山をつうじて民族移動の実態とその様相が相互認識にいかなる影響を及ぼしていたかについての研究は依然として遅れているように見える。そこで、本稿では在朝日本人に関する先行研究に大いに学びながら、近代日本の朝鮮認識の実態をより具体的に検討するため、開港場の釜山を対象としてここに入ってくる日本人の朝鮮に対する他者像がいかん形成され、またそれがいかん特徴を持つものであるかを、開港期から日露戦争以後までの時期を中心として検討してみたい。

II. 近代日本の朝鮮認識

近代日本の朝鮮認識について考える時、まずその以前の江戸時代の日本の朝鮮認識はどのような形で存在していたかを考える必要がある。1980 年代には、「未来志向的な日韓関係」の構築という政治的な意図を背景として江戸時代の両国間の平和的、友好的な関係を強調する傾向が強かった。しかし、こうした立場からは友好的だった両国の関係が 19 世紀後半からいかにして侵略的に転回していったかを理解することができない。したがって、こうした変化を理解するためには、友好的な両国関係の裏には両方とも対抗的な優越感が潜在していた点にも注目する必要がある⁴。

ここで前近代の日本が何を根拠として朝鮮に対する優越感を表出していたかを考える時、神功皇后の「三韓征伐」と豊臣秀吉の朝鮮侵略を根拠とする「朝鮮蕃国観」が江戸時代の知識人の間に広く共有されていたことを指摘することができる。例えば、山鹿素行は「朝鮮、新羅、百済は皆本朝の藩臣」とか、「其国亡ぶること二度、易姓四度也……高麗文武共本朝に及ぶべからず。況や豊臣家の朝鮮征伐をや」⁵とし、新井白石は「古の時には三韓の国々本朝の西蕃にてその国々の君、皆これ本朝に臣属してその王たりき」⁶として朝鮮に対する優越感を現していた。

こうした優越感は実際としての日本の優位を裏付けるものではなく、対抗的なイデオロギーとしての側面が強いものであったといえよう。さて、18 世紀後半から 19 世紀はじめにかけて対外的な危機が深化する過程でも「三韓征伐」と「朝鮮征伐」が優越感の重要な

論拠として提示されていたが、ここでさらに注目されるのは、「神武帝、始て一統の業を立給しより神功皇后、三韓を臣服せしめ太閤の朝鮮を討伐して今の世迄も本国に服従せしむる事など皆武徳の輝くる所なり」⁷とか、あるいは、「魯・墨講和一定、決然として我よりこれを破り、信を夷狄に失ふべからず。ただ章程を厳にし、信義を厚うし、その間を以て国力を養ひ、取りやすき朝鮮、満州、支那を切り随え、交易にて魯墨に失ふ所は、また土地にて鮮満にて償ふべし」⁸あるように、より具体的な朝鮮服属化の論理として展開されている点であり、そうした過程で被差別部落民に対する「異民族起源説」も「三韓征伐」や「朝鮮征伐」と結び付いて現われていた⁹。

一方、こうした近世後期の朝鮮観が当時の民衆の間にも広く共有されていたかについては、より慎重に考えなければならない。なぜなら、近世のナショナリズムと近代のナショナリズムを同じ次元で論じることはできないし、また近世の日本は幕府の専制的な政治支配のもとで政治論争の展開と対外的な情報の公的な流通が厳しく禁止されていたからである。1849年に阿片戦争を主題にした『海外新話』が発禁処分され、著者が厳罰を受けたのは、幕府のこうした方針が幕末まで一貫していたことを物語っている¹⁰。但し、幕府の厳格な統制にもかかわらず、豪農・豪商層や「在村知識人」を中心として幕末期の対外事情をはじめとする政治情報が流通していたことや¹¹、1850年代を前後して神功皇后と秀吉の業績を高く評価する野史が続出していたこと¹²にも留意するならば、地域の間層を媒介とする独自の情報伝達媒体の存在が幕末維新期をへて近代国民国家の形成過程で「国民的な世論」を形成する新聞をはじめとする言論媒体の発達につながる架橋としての役割を果たした点も否定することはできないだろう¹³。このように考えるとき、すでに江戸時代から朝鮮に対する蔑視感が庶民の間にも継承されていたという見解¹⁴には賛成し難いが、幕末期の地域の間層を媒介とする「公論」の発達と明治初期の言論をはじめとする情報伝達の媒体が近代日本の朝鮮認識の形成に果たした影響は否定することができないだろう。それは明治初期の「征韓」をめぐる議論のなかからも確認することができる。

特に江華島事件を前後して明治政府に提出された建白書を見ると、「三韓征伐」の神話を根拠として朝鮮を日本の朝貢国として見做し、日本の国書を受理しない無礼な朝鮮を膺懲しなければならないと主張した例は決して少なくなかった¹⁵。もちろん、当時の日本に「征韓」を反対する主張が全然なかったわけではない。例

えば1870年から1872年にかけて釜山の草梁で朝鮮政府と交渉を推進していた外務省の吉岡弘毅は、秀吉の不当な出兵が朝鮮人を戦慄せしめたところを想起させ、対馬の商人たちの「粗暴苛虐」な商行為を戒めた¹⁶。また、田中正中も「三韓征伐」と「朝鮮征伐」を日本の名誉として考えることを批判し、「征韓」の不当性を指摘した¹⁷。しかし、このように両国間の信義を優先する主張は、近代の日韓関係史からみるとき貴重な遺産であるといえるが、それ以上の発展をみせず消滅していった。なぜこうした認識がそれ以上成長しなかったのだろうか。それは単に伝統的な朝鮮観の拡大再生産という側面だけでは説明できず、近代国民国家の形成過程で文明化と国権の確立という課題と関連づけて検討する必要がある。当時の建白書などでは西欧に対する劣等感を克服するためにも朝鮮に対して日本の優位を確報しようとする主張は盛んに提起されていたのであり、そうした過程で福沢諭吉の「脱亜論」で典型的に現われているように、文明化を推進する日本とその対極にある「野蛮」としての朝鮮という分割線を引いて朝鮮に対する蔑視観が増幅していくのである。特に在野で「征韓」をめぐる議論を展開しながら形成された朝鮮に対する「頑固」「固陋」「蒙昧」などのような否定的なイメージは文明開化政策が本格的に展開する過程でその偏見を一層助長していた。特に朝鮮の開港以後、ジャーナリスト、旅行者、移住民などの渡航がはじまりながら朝鮮人の不潔な生活ぶり、政治的な腐敗と圧政、民衆の無知と無気力、奴隷根性などがさまざまな媒体を通じて朝鮮に対する先入観と追体験的に確認させる役割を果たしていた¹⁸。こうした日本の朝鮮に対する蔑視観は西欧に対する劣等感¹⁹を背景としており、「文明」と「野蛮」の重層構造のもとで朝鮮は西欧に対する劣等感の反面教師として固定していくのである。次には、釜山の開港と日本人の移住、そして開港場での日本人の経済活動などを通じてこうした側面が具体的にいかに展開しながら支配する側と支配される側の「非対称的な権利の位階秩序」²⁰が形成されるかを検討してみよう。

Ⅲ. 釜山の開港と日本人居留地の形成

近世の日韓関係において釜山は朝鮮側の唯一な交流の窓口であった。1678年に釜山の草梁に完成された倭館は約10万坪の広さで当時の東アジアでの居留地としては最大の規模であった²¹。朝鮮時代に倭館での外交交渉と貿易は主に対馬が担当しており、1683年に締結された癸亥約条では、倭館の境界区域の外にでないこと（欄出禁止）、密貿易（潜商）の禁止などとともに

朝鮮からの支給品が倭館に搬入される時に日本人は朝鮮の下級官吏を殴らないことなどを定め、これらの事項を違反した場合には死刑に処するなどの厳格な内容が規定された²²。また、倭館では、女性の出入りが厳格に制限されており、日本人は日本人の女性を同伴することができなかったため、「交奸」による問題が絶えず発生していた。これを統制するために1711年に結ばれたのが辛卯約条であった。ここでは倭館を出て女性を強姦すれば死刑、女性を誘って和奸する者や強姦未遂者は流罪、倭館に入る女性を見ても通報しないで交奸するものはその外の罪を適用するなどの処罰の公平性（彼此同罪）を貫徹した内容を定めた²³。

このように倭館に関するすべての権限は朝鮮の政府にあり、倭館は厳然として朝鮮政府の統制のもとで対馬藩主にその使用を許諾したものであった。しかし、明治維新以後、朝鮮政府が新政府との交渉を断ると、1872年5月には倭館に派遣された官吏は官員をつれて東萊府使との直接交渉を要求するなどの「倭館欄出」を犯した。また、同じ年の9月に日本政府は花房義質を陸軍歩兵の2個小隊とともに派遣して恣意的に対馬が担当してきた朝鮮との交渉を外務省が接受した。この点と関連して1872年から日本の朝鮮侵略がはじまったという主張が提起されているが²⁴、こうした観点からみれば、明治政府はすでに1871年から九州地域の商人たちに朝鮮との貿易開始を命令してこれに従事する者を支援しており、その背後に長州出身の木戸孝允がいたといわれている²⁵。そのいずれも江華島事件が発生する前から日本の朝鮮に対する侵略行為がはじまっていたとも言えるだろう。

1876年の2月に締結された江華島条約で釜山が開港され、8月の条約付録では釜山の日本公使を認め、守門を撤廃すること、開港場に日本人の管理官を常住させること、日本人の通行範囲を朝鮮の里数で10里以内に、釜山と東萊との往来権を認めることなどを定め、同日の「朝日貿易規則」（日朝通商暫定協約）では日本商船の出入りと貨物運輸に関する細則、穀物輸出入の自由、阿片売買の禁止などを規定して朝鮮に対する経済的な支配のための合法的な権利を獲得することになった。

翌年の1月には条約の規定にしたがって草梁の倭館をそのまま踏襲して日本人の専管居留地が形成され、居留民の保護、管理および通商事務のために管理庁を設置し、管理官を任命して派遣した²⁶。1877年9月、日本は太政官の布告125号を出して釜山への渡航を許可し、開港後のわずか2年の間に釜山の居留地は「まるで対馬厳原の町」²⁷というほど日本の領土化が急速に

進行していた。当時の新聞で「釜山浦は永く日本の所屬なるべき旨をも約したり、是等の事は朝鮮の歴史に於ては秘して載せざる事なり」²⁸という根拠もない風聞が報道されていたのも、こうした雰囲気に乗じたものと言えるだろう。

（表1）によれば、開港当時に釜山にいた日本人の居留民の数は82名であった。近世の倭館の時代にはほとんど400~500名が常住していたことに比べれば懸隔に減っているが、それは日本政府が倭館を接受してからほとんどの対馬人を撤去させたからである。その後日本政府は長崎→五島→対馬→釜山をつなぐ航路を開設して朝鮮への渡航と貿易を奨励していたのであり²⁹、居留民の数は（表1）のように急速に増加していた。そのほとんどは自発的な移住であるといえるが、その背景には「新天地」朝鮮への進出に対する積極的な奨励と煽動も少なくなかった。

日本人の朝鮮への移住に対する積極的な煽動は後述するように日清戦争と日露戦争を経ながら頻繁に現れているが、福澤論吉はすでに早くから文明論的な観点から内的な矛盾を解消するためには50~60万人程度の人口を朝鮮に移住させることを主張していた³⁰。（表1）でもわかるように1881~1882年と、1891~1894年の2回の減少を除くと、釜山の日本人の数は続けて増加の傾向を見せており、福沢が大規模の移住を主張した1889年の以後には大幅に増加していることがわかる。1889年からは大阪から釜山を往来する定期航路の開設や貿易商の増加と規模の拡大に伴う雇員と労働者の流入も増加に影響を及ぼしただろう。さて、ここで1882年と1894年の減少については、壬午軍乱と日清戦争が影響を及ぼしたものとして、また1881年の減少については元山の開港以後、そちらの方に移住した日本人が多かったからであると見るのが一般的である³¹。しかし、より広い視点からみる時、日露戦争にもかかわらず釜山の日本人の数が大幅に増加しているのを見れば、それは単に内乱や戦争によって生命に脅威を感じた日本人が引き揚がたからであるとみることはできない。むしろ開港場での日本商人たちの横暴とこれに対する反日感情の高潮が引き揚がたに影響を及ぼしたということだけでなく、日露戦争の時点ですでに日本人の優位と権益が確固なものとなっていたことも考慮する必要があるだろう。次にはこうした側面を念頭において、開港後に釜山に渡ってきた日本商人たちの経済活動の実態をもっと具体的に調べてみることにしよう。

(表 1) 年度別 在釜日本人の数

年度	戸数	人口	年度	戸数	人口	年度	戸数	人口
1876	-	82	1889	628	3,033	1900	1,082	6,067
1879	-	700	1890	728	4,344	1901	1,250	7,029
1880	402	2,066	1891	914	5,254	1902	1,352	9,691
1881	426	1,925	1892	938	5,110	1903	1,582	11,711
1882	306	1,519	1893	993	4,750	1904	1,891	11,996
1883	432	1,780	1894	906	4,028	1905	2,363	13,364
1884	430	1,750	1895	952	4,953	1906	2,981	15,989
1885	463	1,896	1896	986	5,423	1907	3,423	18,481
1886	488	1,957	1897	1,026	6,065	1908	4,213	21,292
1887	-	2,006	1898	1,055	6,242	1909	4,284	21,697
1888	-	2,131	1899	1,100	6,326	1910	4,508	21,928

*釜山商業會議所『釜山要覽』1912；釜山商工会議所『新釜山大觀』1934 参照。

IV. 釜山での日本人の経済活動

(表 2) は、釜山の日本人の専管居留地における日本人の本籍地別の分布図である。時期は 1912 年として日韓併合以後の統計であるが、(表 3) の 1896 年と 1906 年の本籍地別の在朝日本人の数を参考してみれば、九州地域のなかでも長崎と山口が圧倒的な多数を占めており、特に 1890 年代にはこの二つの地域の出身者が過半数以上を占めていることがわかる³²。さらに、開港期の釜山での日本人の商業活動によれば、1881 年の居留民の職業のなかでも圧倒的に多かったのは卸売り業であり、その次が匠人、貿易商、小売商、料理やなど

の順であった³³のように一番多かった卸売りは、朝鮮人に商品の強要をしたり約束よりも安い値段でものを買い入れたりするなどの不法的な取引が多く、そのため 1880 年の 11 月には日本の領事館で「卸売り営業人取締り規則」を定めて不法行為を禁止することさえあった³⁴。また、このようにして利益を得た商人たちはほとんどが高利貸を兼業していた³⁵。そして高利貸を通じて借金を弁済できない時には、朝鮮人の家屋や土地を没収し、またその土地で生産された米を日本に搬出することによって、朝鮮の米不足と民衆の経済的な生活を圧迫していた。

(表 2) 在釜日本人専管居留地の本籍地別・男女別分布 (1912 年末現在)

府縣別	男	女	計	府縣別	男	女	計
山口	2,519	2,247	4,766	東京	264	223	487
長崎	1,751	1,478	3,229	鹿児島	210	125	335
福岡	1,098	933	2,031	京都	196	136	332
広島	1,047	871	1,918	三重	188	130	318
大分	770	671	1,441	和歌山	174	137	311
大阪	526	467	993	愛知	180	124	304
佐賀	550	413	963	徳島	166	122	288
愛媛	536	395	931	鳥取	148	118	266
岡山	536	374	910	石川	120	98	218
熊本	503	341	844	福井	128	88	216
兵庫	437	379	816	滋賀	137	73	210
香川	386	305	691	其他 23 縣	1,276	892	2,168
島根	389	266	655	合計	14,235	11,406	25,641

*釜山商業會議所『釜山要覽』1912、p.10。

このように、土地の蚕食は日本への米の搬出とも密接な関係にあった。1877年から1882年にかけて釜山と元山を通じて搬出された米は1,529,636円に達しており³⁶、日本で豊年によって米価が暴落する状況でも米の搬出は続いた。在釜日本人の経済活動において、高利貸と土地の買入、そして米の搬出は密接に連動していたのである。

こうした経済活動で日本商人は朝鮮人に対して傲慢で暴力的な商行為を行っていた。高利貸の利息は高く、貸したお金を期限のうちに弁済できない場合には暴力的な手段を動員することもあった。1892年『読売新聞』

の主筆代理をやめて朝鮮の旅に出た中井錦城の記録をみると、日本人の朝鮮人に対する乱暴な行為をあるがままに伝えている。例えば、「宿屋に入り、其の二階から町を眺めていると、日本人が韓人を苛酷に取扱うのが目につく、それが二、三十分間に四、五度も韓人を撲るのである」とか、「朝鮮人が貸金や売掛代金を払わぬ時には、その朝鮮人の門や戸を釘付にしたものだ、それが追々できぬようになったから、今度は自宅に牢を設け、朝鮮人を捕えて来て其の内に入れ、親類や友人が金を償うを待て、始めて放免して遣ることにした」³⁷というありさまであった。

(表3) 出身府縣別 在朝日本人

1896年			1906年		
府県	人数	比率 (%)	府県	人数	比率 (%)
長崎	3,587	30.3	山口	13,251	17.0
山口	3,294	27.8	長崎	8,542	11.0
大分	970	8.2	福岡	5,842	7.5%
福岡	646	5.4	大分	5,436	7.0
熊本	460	3.9	広島	4,176	5.4
大阪	427	3.6	熊本	4,164	5.3
広島	310	2.6	大阪	3,772	4.8
佐賀	257	2.2	佐賀	2,540	3.3
兵庫	233	2.0	兵庫	2,252	2.9
東京	229	1.9	東京	2,121	2.7
その他	1,441	12.2	その他	25,816	33.1
計	11,854	100.0	計	77,912	100.0

*木村健二「明治時代 日本調査報告書」에 나타난 朝鮮認識」 p.366.

こうした日本商人の横暴は、単に開港場の釜山だけの現象ではなかった。例えば、漢城の場合、1897年2月に16ヶ所であった日本人の質屋は1890年代の末には約40ヶ所に増え、その客はほとんどが朝鮮人であった。当時の外交官であった信夫淳平は、「本邦商人にても少しく資金に余裕ある者は、普通の商業を行い若しくは新事業を経営するよりも、典当(朝鮮語で質屋)金貨の業を開くを以て利益割合に多しとなし、亦他を顧みるに念慮なきもの如し……本邦商人の信義を軽んじ契約に責任なく、一言にして括れば、欺して取るを以て商略の最も巧なるものと為すか如き」³⁸ 風潮が一般的であったと指摘している。実際に当時の居留商人の多くは「二言目には腕力」を振ったといわれており、「韓人ヲ輕蔑スルコト甚ダシク其花客ニ対スル取扱イサエモ丁寧極マリ、言語粗暴ナルコト恰カモ奴僕ニ対スルガ如キ」³⁹というありさまであった。

開港期の朝鮮の日本に対する経済的な従属如何は別にするにしても、在朝日本人たちは「未開」な朝鮮に対する優越感と蔑視観をもとにしてすでに支配する側で君臨していたのである。在朝日本人が伝統的な朝鮮観と文明的な優越感を持って朝鮮人を露骨的に蔑視していたことは、開港場での日本人の略奪的な商行為と暴挙を非難する日本言論の自戒の声からも確認することができる。『朝野新聞』では、「明治一二年の今日に於ても猶彼の吞噬蠶食のことを喜ぶ者あるは蓋し西郷江藤の徒弟にあらざれば、必ず朝鮮征記を一読して妄りに豊公の虚名を慕ふの白痴漢なり……我邦は務めて其の固陋を誘掖し、弱小を援助し、輔車相依るの勢を為て共に他の強国が南進を防ぐを以て、将来の良策とせざる可らず」といって、釜山での居留民の暴挙を非難していた⁴⁰。『朝野新聞』ではまた、日本人の口碑で伝承されている「文禄征韓」で加藤清正の武勇と朝鮮

八道の蹂躪は朝鮮人が常に日本を「鬼のように」考える結果をもたらしたといい、「我政府に於て信義を朝鮮に示し、十分に其の歡心を得て親密の交際を為さんと欲せば、第一に居留地の取締りを嚴重にし、我が無頼の悪漢をして彼の国人を凌辱するが如きの所為を禁止せざるべからず」⁴¹と主張していた。

もちろん、こうした主張も実は西欧列強の侵略に対応したものとして、日朝間の不平等条約に対する認識の限界と朝鮮に対する優越感を元にしていてた。たとえば、『横浜毎日新聞』では、西欧の「東指の念」を断念させるためには朝鮮を助けてその智見を開き、自ら富強を図るようにしなければならないといい⁴²、『朝野新聞』では居留民の暴挙を警戒しながら、「朝鮮と交通するの得策たる、成るべく彼の政府と人民との歡心を博取して漸次に我が権勢を彼に及ぼすに在り」といってその意図を露骨的に現わしていた⁴³。次にはこうした日本人の優越感が日清戦争を前後して朝鮮への渡航が増加する過程でいかなる特徴を見せているかを検討して見よう。

V. 日清、日露戦争と高まる植民熱

開港以後、朝鮮民衆の反日認識がいつから形成されたかを考える時、開港場と内地との地域的な偏差を考慮する必要があり、開港場では他の地域に比べて日本商人の不法的な商行為等によって早くから反日感情が表出されていたといえることができる。特に壬午軍乱を前後して開港場では反日的な雰囲気が増強していた⁴⁴。そして、日清戦争の後に日本人の移住が大幅に増加しながら朝鮮人の日本に対する感情は極度に悪化していた⁴⁴。

1892年から1893年にかけて発生した「斥倭洋運動」では、日本商人の貿易活動によって経済的な弊害をもたらしているとして日本商人の家屋が襲撃の対象になることもあった⁴⁵。本商人は朝鮮人の略奪をさけるため、急いで米を現金に変えたので釜山の市場に大量の米が流入され、米価の下落をもたらして民衆の窮乏な生活がいつそう困難になった⁴⁶。

こうした状況下でも釜山は他のどの地域よりも日本の領土化が進展していた。1884年に朝鮮を旅行したイギリス人の北京駐在の書記官である W.R. Carles は、「ここは朝鮮人が住んでいない日本の都市のようである」⁴⁷といい、1894年に朝鮮を旅行した Isabella L. Bishop 女史も「釜山は日本人の商店が位置している広い道路や各種のイギリス風、日本風の建物とともにある程度山と海に囲まれているかなり良い日本風の町である」⁴⁸として日本化が進んだ釜山の姿を伝えている。

(表 1) でもわかるように、日清戦争以後には釜山に移住する日本人の数が急激に増加しており、釜山は名実ともに「日本人の町」としての姿を整えていく⁴⁹。日本殖民協会では戦争での勝利とともに商業上において一番便利で重要な場所を選んで店舗を開くべきだとして⁵⁰ 移住を奨め、こうした過程で朝鮮に入ってくる日本人の横暴が一層酷くなっていたことは、福沢が在朝日本人の取締りを徹底的に強化しなければならないと主張したことからもわかる⁵¹。実際に日本政府は日本人の無秩序な渡航を統制するために 1896 年には朝鮮への無断渡航を禁止したが⁵²、それもまもなく 1899 年 8 月に廃止された⁵³。

甲申政変以後、清国の朝鮮に対する干渉が厳しくなるにつれて小幅の増加をみせていた在釜日本人の数は、1889 年以後再び大幅に増加し、日清戦争の直前にはもう一度減少の趨勢をみせていたが、戦争で勝利してから日本の影響力が拡大しながら釜山を日本の植民地のように見做す傾向は一層露骨になり、『讀賣新聞』に戻った中井錦城は釜山にいる友人に手紙を出すとき、「長崎縣 釜山町」と書いて送り、それが届いたことを愉快だったという⁵⁴。

日清戦争以後の朝鮮の現地に対する外務省の領事館報告書を見ると、朝鮮の農業、漁業と商業などに対する否定的な評価とともに、この分野での権利の行使を訴えるのが特徴であった。そこで朝鮮は「無限の寶庫」、「未開の沃野」として描かれ、日本人がその「荒蕪地」の開発に積極的に参加すべきだと強調していた⁵⁵。

特に日清戦争後にもっとも積極的な地域は地理的にも朝鮮と近い山口県であった。当時の山口で発行されていた『防長新聞』では、朝鮮社会の未開、官吏の無能と不信、虐政などのように明治初期に見せていた朝鮮に対する蔑視観を背景にして「到底に商業の進歩を期待できない」とか、「数百年間の酔生夢死の状態」としての朝鮮の「未開」と「不潔」を伝えており、「京釜鉄道の敷設という絶好の機械に渡航」しなければならないとして「新天地」朝鮮への移住を訴えていた⁵⁶。こうした朝鮮に対する報告と紹介はほとんどの場合は日本人の進出を積極的に奨励するあまり扇動的な傾向が強く、朝鮮の「未開」に対するイメージは一層意図的に固定されていたといえることができる。

日露戦争にさいしては 1905 年 1 月に釜山の草梁と京城をつなぐ京釜鉄道が開通され、その年の 9 月には釜山と下関をつなぐ関釜連絡船の壹岐丸が、そして 11 月には対馬丸が就航を開始した。以後、関釜連絡船は植民地期において韓半島と日本の本土との間で人間と商品の輸送手段としてもっとも重要な役割を遂行して

いた。こうした関釜連絡船の就航は高まる殖民熱を一層加速化させ、朝鮮に対する未知の欲望と否定的な朝鮮イメージが交錯しながら多くの日本人が渡っていった。朝鮮の底賃金と安い生活費⁵⁷も朝鮮への移住に対する期待を加重させた。伊藤博文統監は、「韓国と密接な関係を結ぶためには、どうしても内地から多数の移住を要するということになりまして、半島に日本文化、並に国産品を紹介して認識を深める必要が特にあることに思いを致されまして、(中略) 韓国に進出方熱心に慫慂」していた⁵⁸。実際に当時には青柳綱太郎の「韓国移民策」、高橋刀川の「在韓成功の九州人」、福本誠の「満韓殖民論」、小村寿太郎の「満韓移民集中論」などの殖民論が大挙に出版され、朝鮮を日本の勢力圏＝殖民圏として想定して日本人の移住を集中させることを主張していた⁵⁹。こうした殖民熱の背景には、「移民というものを露骨に解釈すると、優等民族が劣等民族を支配すること」⁶⁰とあるように、朝鮮に対する民族的な優越感が根を降ろしていた。日露戦争の直後に朝鮮を訪問した広島県出身の国会議員である荒川五郎は、「実に衛生じゃの病気じゃの無頓着千万、そこになると悪く言ふやうじゃが、人間よりか獣類に近いと謂ふても宜しやうである」⁶¹として朝鮮の「未開」なイメージを伝えていた。

このように、日露戦争後に朝鮮での日本の優位が確固なものとなるにつれて朝鮮の植民地化が本格的に進行され、釜山はまるで日本の領土のような地域として変貌していった。日清戦争の時までも釜山の反日的な民心のために釜山の市街地の計画に消極的であった在釜日本人たちは、日露戦争での勝利を契機として関釜連絡船の就航とともに釜山を海陸連帯輸送の中継地として作るために本格的な市街地計画に着手し、1906年の釜山築港工事もその一環として行われた⁶²。すでに植民地支配の前から釜山が日本の植民地のような様子をみせていたことは、釜山駅の開業当時の状況を報道した内容のなかでも生々しく現れている。

当日釜山市中は一般に休業し幔幕を張り軒灯を掲げ国旗を掲げて祝儀を表し、或は女装し男装し、紅裙連のはやしに連れて練り歩き、又は連絡船汽車等その他十カ所の山車面白く、市中処々に舞台を設け、随意得意の芸を演じ意外の喝采を博する等、全市中殆んど狂せん計りに歓喜したり。恰も当日より関釜連絡船の隔日増発とともに、新義州釜山間の直通列車に接続するあり、如何に市民の之を歓迎したるかを知るに足るべし⁶³。

以後、関釜連絡船を利用して渡ってくる日本人のほとんどは朝鮮に対する日本の武力支配と植民地的な不平等条約を背景として利益を得ようとしており、釜山は彼らにとって大陸進出の橋頭堡になった。彼らは列をつくって釜山から朝鮮の内地に入っていく、全国の各地で土地を安く買収し、日本の商品を売っていった⁶⁴。日露戦争での勝利によって朝鮮での経済活動で不安な要素がなくなった状況で、彼らのほとんどは開港期に比べてもっと露骨に朝鮮、朝鮮人を野蛮視し、日本の公使までも嘆くほど傲慢な言行を行使しながら日本の朝鮮支配に先兵的な役割をはたしていた。

VI. むすびに

近代日本のオリエンタリズム的な朝鮮観の原型は「三韓征伐」の神話と豊臣秀吉の「朝鮮征伐」を背景として近世後期から形成されていたが、それが近代国民国家の国民統合にイデオロギー的な役割を果たすためには文明化のイデオロギーが必要であった。このように近代国民国家の形成過程で結び付いた伝統的な朝鮮観と文明化の立場から朝鮮を野蛮視する蔑視観は開港場の釜山での実相を目撃し、それを伝える過程で追体験的に確認され、日清戦争と日露戦争を経ながら固着されていった。

朝鮮が植民地支配を受ける前から開港場などで行われた日本人の様々な傲慢な暴挙も、このように明治維新を経ながら近代国民国家の形成期に広範囲に拡散されていた「野蛮」、「未開」な朝鮮のイメージを背景とした民族的な優越感と蔑視観が根を下ろしていたといえるだろう。そういう意味で釜山は国民国家の境界線と地政学的な境界を超えて「文明」としての日本が野蛮としての朝鮮に入ってくる入り口でもあった。いち早く開港した釜山は植民地支配の前から植民地と同じような支配する側と支配される側との「非対称的な権利の位階秩序」が形成されており、日本の領土化が早くから進行していた。開港後に釜山への日本人の渡航者が増加し、在朝日本人の社会が形成されていくなかで「境界がマイノリティをつくるのは必ずしも一方的ではない」⁶⁵という現象は釜山の日本人の社会の特性を通して確認することができるのである。

したがって釜山は36年間の植民地支配の期間だけを通じて日本の影響を受けたのではなく、すでに開港とともに日本の影響のもとで入っていたと見る必要がある。それによって釜山の日本化は他のどの地域よりも深い影響を残す結果をもたらした、それは敗戦後に在朝日本人が引き揚げて半世紀以上の時間が経った時点でも釜山の隅々に植民地時代の残滓が残っていること

からもわかるだろう。朝鮮の開港後、多数の日本人が「新天地」に対する夢を抱いて釜山に入って来たのであり、帝国の敗亡とともに釜山から引き揚げていったのであるが、彼らが残した有形無形の残滓は未だ釜山に残っているのである。

注

1. 先行研究は数多くあるが、先駆的なものとしては、旗田巍『日本人の朝鮮観』勁草書房、1960；姜徳相「日本の朝鮮支配と民衆意識」(『歴史学研究』青木書店、1983、11)；中塚明『近代日本の朝鮮認識』研文出版、1993 など参照。
2. 内藤正中『山陰の日朝関係史』報光社、1993；中村均『韓国巨門島のつばん村』中公新書、1992；橋谷弘「釜山・仁川の形成」、『近代日本と植民地 3』岩波書店、1993。韓国での研究としては、金義煥『釜山 近代都市 形成史 研究』研文出版、1973；김병하「開港期の 居留日本人과 그 職業」(『慶熙大校論文集』、1972)；孫禎睦「開港期 韓国居留 日本人의 職業과 賣買春・高利貸金業」(『韓國學報』、1980年 冬)；釜山經濟史編纂委員會『釜山經濟史』釜山商工會議所、1989；孫禎睦『日帝強占期 都市社會史研究』一志社、1996；崔元奎「近代植民地 都市 釜山の 發展」(『釜山の 歴史와 文化』、釜山大韓民族文化研究所、1998) 等。
3. 木村健二「明治期の日本居留民団」(『季刊三千里』1986、冬)；同『在朝日本人の社会史』未来社、1989；高崎宗司『植民地朝鮮の日本人』岩波書店、2002。
4. 荒野泰典『近世日本と東アジア』東京大学出版会、1988；池内敏「近世後期における対外観と〈国民〉」(『日本史研究』344、1991、4)。
5. 『山鹿素行全集』思想篇、第12巻、p.22。
6. 『新井白石全集』第3巻、1906、p.635。
7. 『林子平全集』第1巻、p.388。
8. 『吉田松陰全集』第3巻、p.38。
9. 例えば、「唯穢多は元来外国より参りたる夷狄の種にして、我天照大神宮の御末にて無ゆえなり、夷狄は禽獸同然なるものゆえに穢らはしきことを知らぬものなり……朝鮮人、琉球人、阿弥陀人は天照大神の御末にあらず」(海保清陵「善中談」(『日本經濟叢書』第18巻、pp.16~17) とか、「ここにはもっぱら皮の加工に従事するいわゆる穢多がたくさん住んでいる。……彼らの由来や素姓に関しては、はっきりしない点が多い。……おそらくその隣国朝鮮と闘った時の捕虜で、日本につれて来られた後に赦されたのであって、これにほかの破廉恥な宿なしなどが加わったのであろう」(『シーボルト著、斎藤信訳『江戸参府紀行』東洋文庫、1967、p.142』という説明からもわかるように「三韓征伐」と「朝鮮征伐」がその重要な根拠となっていた。
10. 宮地正人「風説留からみた幕末社会の特質」(『思想』831、1993、p.14)。
11. 宮地正人『幕末維新期の文化と情報』名著刊行会、1994；田崎哲郎「在村知識人の成長」(辻達也『日本の近世10 ― 近世への胎動 ―』中央公論社、1994) 参照。
12. 横山俊夫「神国への道―異国接近と幕末文化」(林辰三郎

- 編『幕末文化の研究』岩波書店、1987) 参照。
13. 近代形成期に現れた様々なメディアの出現が日本史上において未曾有の広範囲な国民的世論=「公論」的な世界を形成し、それが当時の政治と社会の動きにも至大な影響を及ぼしていた点については、山室信一「国民国家形成期の言論とメディア」(日本近代思想大系『言論とメディア』岩波書店、1990、p.477) 参照。
 14. 森山茂徳「明治時代 日本指導者の 朝鮮認識」(『近代交流史와 相互認識』、아연출판부、2002)。
 15. 牧原憲夫篇『明治建白書集成』3巻、筑摩書房、1986、p.108；同、4巻、p.460、960。
 16. 牧原憲夫『明治7年の大論争』日本経済新聞社、1990、pp.191~197。
 17. 明治文化研究所編『明治文化全集』雑史篇、第25巻、日本評論社、1967、pp.27~28。
 18. 『朝野新聞』1876.3.6、1877.7.8、1878.12.6、12.22、1881.2.26、『郵便報知新聞』1876.3.9、3.10、3.15、1880.8.6、『横浜毎日新聞』1876.6.1、1877.4.18 等参照。
 19. 『朝野新聞』1875.10.23、論説、1880.9.2、雑録 参照。
 20. 前掲論文「マイノリティと国民国家の未来」p.123。
 21. 江戸時代の長崎出島は約4千坪の規模であった。草梁の倭館は出島の約25倍に達していたのである(田代和生『倭館』文藝春秋、2002 参照)。
 22. 上掲書、pp.183~184。倭館での密貿易とその処理については尹裕淑「近世癸亥条約の運用実態について ― 潜商、欄出を中心に ―」(『朝鮮学報』1997、p.164)。
 23. 前掲書『倭館』pp.185~186。
 24. 1872年の外務省の「倭館接受」を日本の朝鮮侵略の始まりと見る点については孫承哲「1872年の日本の倭館占領と朝鮮侵略」(『軍事』28、1994) 参照。
 25. 前掲書『植民地朝鮮の日本人』p.9。
 26. 管理官と管理庁は1880年2月にそれぞれ領事と領事館として改称された。
 27. 『朝野新聞』1878.12.10。
 28. 『横浜毎日新聞』1876.4.26。
 29. 山田昭次「明治期の日朝貿易」(家永三郎退官記念論文集『日本近代の国家と思想』、三省堂、1979)、p.70。
 30. 1889.4.29「対韓の方略」(『福澤論吉全集』第16巻)。
 31. 前掲書『植民地朝鮮の日本人』pp.5~6。
 32. 特に山口県の出身が多かった点については、木村健二『在朝朝鮮人の社会史』未来社、1989、pp.40。
 33. 박한철, 『開港期 釜山港을 中心으로 한 日本人의 商業活動』(釜山大學校碩士學位論文、1985)、p.49。
 34. 前掲書『植民地朝鮮の日本人』p.9。
 35. 高崎宗司は、高利貸は朝鮮開港時だけでなく日本の敗戦時までの一貫した特色であったと指摘している(上掲書、p.8)。
 36. 前掲書『釜山經濟史』p.316。
 37. 中井錦城『朝鮮回顧録』1915(前掲書『植民朝鮮の日本人』p.38)。
 38. 信夫淳平『韓半島』1901(上掲書、p.67)。
 39. 『日韓通商協会報告』16、1896(同上)。
 40. 『朝野新聞』1879.7.17。
 41. 『朝野新聞』1880.9.11。

42. 『横浜毎日新聞』1878.7.3。
43. 『朝野新聞』1879.8.28。
44. 「韓民極度に日本人嫌忌」1896.2.18. 『東京日日新聞』
45. 「釜山の邦人2名東学党に襲わる」(『時事新報』1894.10.28)。
46. 「釜山は米の山」(『時事新報』1894.6.10)。
47. 김현수 「19世紀末 英國人の 旅行記에 나타난 韓國의 變化相 — 서울 및 開港地 (제물포, 釜山) 모습을 중심으로 —」、p.240。
48. 上掲論文、p.242。
49. 1910年御釜山の日本人専管居留地の朝鮮人の数が20,588人(4,317戸)であるのに対して、在釜日本人の数は21,697人(4,284戸)であった(釜山府『釜山商工案内』1932、p.3)。
50. 『殖民協會報告』1895.1、p.109。
51. 「在韓日本人の取扱を嚴にす可し」1896.7.13 (『福澤論吉全集』第15卷)。
52. 「朝鮮に無斷渡航禁止」1896.5.11 (『新聞集成明治編年史』第9卷)。
53. 1899.8.18、勅令 376號。
54. 前掲書『植民地朝鮮の日本人』p.47。
55. 前掲論文「明治時代 日本の 調査報告書에 나타난 朝鮮認識」、p.359。
56. 上掲論文、p.368。
57. 「生活費の廉なる、日本の三分の一」(山本庫太郎『最新朝鮮移住案内』民友社、1904、p.63)。
58. 前掲書『朝鮮の回顧』近沢書店、1945、p.235。
59. 木村健二「近代日本の移民、植民活動と中間層」(『展望日本歴史20 帝国主義と植民地』東京堂出版、2001、p.74)。
60. 日本移民協會編『最近移植民研究上』東洋社、1918、pp.1~3。
61. 荒川五郎『最近朝鮮事情』清水書店、1906、p.86。
62. 김경남 「韓末・日帝下 釜山地域の 都市形成과 工業構造의 特性」(『地域과 歴史』、第5卷、1999.2)。
63. 斎藤哲雄『下関驛物語』近代文藝社、1995、pp.124-127。
64. 金贊汀『開釜連絡船：海峽を渡った朝鮮人』朝日新聞社、1988、pp.12~13。
65. テッサモリス=スズキ「マイノリティと国民国家の未来」(『日本はどこへいくのか』小学館、2003)。

ばく じんう／淑明女子大学校・教授